

太陽と星の下

小川未明

青空文庫

エスしょうねん
 S少年は、町へ出ると、時計屋の前に立つのが好きでした。そして、キチキチと、小さな針が、正しく休みなく、時をきざんでいるのを見て、——この時計は、どこの工場こうばで、どんな人たちの手で造られたのだろう——と、空想するのでした。

すると、明るい、清潔な、設備のよくいきとどいた、近代きんだいふうの工場こうばが、目の前まえに浮かび上がります。彼は、いつか自分じぶんも、こんな工場こうばへ通つて働はたらき、熟練じゆくれん工こうになるかもしれないと、思おもつたりするのでした。こうして、町まちは、少年しょうねんにいろいろな、たのしい夢ゆめを与あたえてくれました。

ある日ひ、四つよつじの角かどのところへ、新あたらしく美術店びじゅつてんができました。しかし、そこには、新あたらしいものより、古ふるいもののほうが多おほかったから、むしろ、こつとう店てんというのかもしれない。
 ません。

入り口ぐちのガラス窓まどの内うちには、まるいつぼがおいてありました。

少年しょうねんは、その深ふかみのある、青あおい海うみをのぞくような色いろに、ひきつけられたのです。

「いい色いろだな。」と、そのやわらかな感かんじは、なんとなく気持きもちをやわらげました。まだ、なにかあるかと、あたりを見みまわすと、おくの方ほうの台だいに、赤あかいさらがかざってありました。

これは、夏の晩方、海面へ、たれさがる雲のように、みずみずとして、美しかったので、こんどは、目がその方へ奪われてしまいました。なんでも、その図は、中国人らしい、一人の女が、赤いたもとをひるがえして、おどっているのです。

少年は、近くそばへ寄つて見たかったのだけれど、買えるような身でないから、さすがにその勇気がなく、こころ残りを感しながら、店さきをはなれたのです。

すこしくると、魚屋がありました。店さきの台の上に、大きな切り身がおいでになりました。その肉の色は、おどろくばかり毒々しく、赤黒くて、かつて、魚では、こんなを見たことがありません。

「これは、鯨の肉だな。そうだ、南極からきた冷凍肉だ。人間とおなじく、赤ちやんをかわいがる哺乳動物の肉なんだ。」

こう思った瞬間、いままでの頭の中のなごやかなまぼろしは消えてしまつて、そこには、残忍な、血なまぐさい光景が、ありありと浮かびました。

捕鯨の状況を考えて、たえられない気持ちが出て、少年は、途中にある丘の状に、丘の上には、大きなけやきの木がありました。その根に、腰をおろしたのです。ついこのあいだまで、芽をふいたばかりの新緑が、うす緑色に煙つて

いたのが、すっかり青葉あおばとなっていました。ここからは、あちらまでつづく、町まちの方ほうが見みおろされました。ぴか、ぴかと、線せんを引ひくごとく流ながれるのは、自動車じどうしゃでありました。そのかぶとむしのような、黒光くろびかりのする体からだに、アンテナを立てたてていて、走りはしながら、どこかと話はなしたり、また、放送ほうそうの音楽おんがくをきいたりするのです。

「人間にんげんは、ほかの動物どうぶつのできない発明はつめいをする。もし、おれが鯨くじらだったら、どうして人間にんげんという敵てきから、のがれることができようか。」と、少年しょうねんは、空想くうそうしました。

もつと、もつと、氷山ひょうざんのおく深く、安全あんぜんな場所ばしょをさがして、はいりこむだろう。

いや、それもだめだ、どんなかくれ場ばでも、人間にんげんはさぐる。精巧せいこうな機械きかいを持つもっているし、また、おそろしい武器ぶきを持つもっている。そう考えると、少年しょうねんには、人間にんげんがひきよみうに見みえました。そして、自分の力ぢぶんちからよりほかに、たのむことができない鯨くじらがかわいそうになりました。それは鯨くじらとかぎりません。命いのちのとうときは、強つよいもの、弱よわいもの、べつにかわりがないからです。

少年しょうねんは、世よの中なかの、不公平ふこうへいや、不平等ふびょうどうが、つきつきにうずまき、頭あたまがつかれたので、やわらかな草くさの上うえへ、仰向あおむけになつてねころび、目めをふさぎました。太陽たいようの光ひかりは、やわらかなようでも、するどかつたのです。目めをとじていても、まぶしかつたのでした。

このとき、耳もとへ、ささやくものがありました。大空をわたる、初夏の風が、草の葉を分ける音でした。

「おごるものは、おごらせておくがいいのさ。かならず天罰があたるから。いつ氷河がやってくるかもしれない。あまり不意で、逃げるひまのなかった、マンモスの肉が、まだくすらずに、氷の中から出たというではないか。それどころか、今日にでも、太陽が大爆発をしないとかがらない。そのときは、地球上のものは、ことごとく焼けてしまうのだ。」

あいづちをうつごとく、どこかの工場から、正午の汽笛が鳴りひびきました。少年は、これを機会に、丘を下りたのでした。

机の前にすわって、雑誌を見ていると、Kくんが、ボールをしないかと、S少年を呼びにきました。

すぐ外へとび出すと、

「畑へ、いこうよ。」と、Kが、いました。

このころまで、家と家の間の通路となっている路地しか、子供たちにとって、遊び場がなかったのを、ようやく、青物が出まわり、家庭菜園などというものが影を消してか

ら、ふたたび、いままでのごとく、空^あき地^ちや、原^{はら}っぱが、子^こ供^{ども}らの手^てにかえったのです。したがって、彼^{かれ}らは、あやまって、窓^{まど}のガスをわり、しかられることもなく、たのしくのびのびとして、ボールが投^なげられるのです。

まりを投^なげているさいちゆうでした。

「Kちゃん、君^{きみ}に飛^ひ行^{こう}機^きが見^みえる。」と、S少年^{エスしょうねん}は、なにを思^{おも}い出^だしたか、手^てをやすめて、空^{そら}をながめました。

Kも手^てをやすめて、おなじく空^{そら}をながめたのです。

「音^{おと}はするけど、なんにも見^みえないね。Sちゃんには見^みえる。」と、Kは、ききかえしました。

「たいへん近^{ちか}く音^{おと}がきこえるけど、わからない。よっぽど高^{たか}いところを飛^とんでいるんだね。」

二人^{ふたり}は、しばらく、ボールを投^なげるのを忘^{わす}れて、夢^{むちゆう}中で、飛^ひ行^{こう}機^きをさがしていました。戦^{せん}後^ご、彼^{かれ}らの希^き望^{ぼう}は失^{うし}なれたので、せめてその姿^{すがた}だけでも見^みたかったのです。この瞬^{しゆん}間^{かん}にも、せめて思^{おも}いきり高^{たか}く上^あがって、自^{じゆう}由^{ゆう}に飛^とべたらという、あこがれが胸^{むね}の中^{なか}を、わくわくさせました。やがて、空^{そら}は、石^{せき}竹^{ちく}色^{いろ}から、オレンジ色^{いろ}と変^かわって、暮^くれかかっ

たのであります。

すでに、あのときから、はや一週間近くたったであろうか。少年は、あの中国の女の子のおどっている、赤いさらが見たくなりました。

「散歩してこようか。」

町へくると、いつものごとく、トラック、自転車、自動車走っていました。さんさんたる太陽が、あらゆる地上の物体を光の中にただよわせていました。少年は、四つつじのところをうろつきながら、

「おれはきつねにばかされているんでないだろうな。」と、自分に向かっていたのでした。

なぜなら、あのこつとう店が、いつのまにかなくなつて、見つからなかつたからです。そのかわり、そこが葬儀屋となつて、真新しい棺おけや白い蓮華の造花などが、ならべてありました。

少年は、しばらく考え込んで、去りかねていましたが、念のため、魚屋の前を通つてみました。すると、魚屋は、前とおなじところにあつて、台はかわいて、もうその上には、鯨の肉は見あたりませんでした。

彼は、家に帰ると、この話を兄さんにしたのであります。

「あんまりの変わりかたで、僕、きつねにばかされたのでないかと思つた。」

これをきくと、横になつて、新聞を見ていた兄さんは、笑いながら、起き上がりました。そして、弟に向かつて、つぎのようにつたのです。

「戦争の終わるころは、品物が不足して、だれでも、すばしっこく、人のほしがる品を動かしたものは、遊んでいても、大もうけができたのだ。もとより、そういう人々は、世の中のためとか、他人のためとかいうことは考えていない。ただ自分さえよければいいので、ぜいたくしたもののさ。一方には、いままでの金持ちが貧乏して、着物を売るやら、家宝を売るといふふうで、町にも、幾軒か、こつと店ができたのだよ。新興成金を目あてにね。ところが、やみ物資もなくなると、たちまち金もうけの道がとだえて、にわか大尽は、また昔のような丸はだかとなつて、もうこつと品など買うものがなくなる。それどころか、中国へ出す国内の生産が復興しないから、ともぐいするようになる。弱いものからまいってしまう。近ごろ、死ぬ人がめつきりふえたのもこんな原因がある。だから、町のこつと屋が、葬儀屋に早がわりするのは不思議でないよ。」

「兄さん、息苦しい世の中になつたんだね。」と、少年は、いいました。

「なにしろ、せまい国の中へ、八千万からの人間がおしこめられているのだものな。」と、兄さんは、ため息をつきました。

「それは、僕にもわかるよ。なぜって、小さな入れ物の中へ、金魚をたくさん入れておくと、だんだん死んでしまうものね。」

彼は、このごろ、やっと、ひろびろとした、原っぱで、野球のできる喜びを思い起こして、不幸な祖国のきゆうくつな現状を悲しまずには、いられませんでした。

「どれ、原っぱへ遊びにいつてこよう。」

少年は、じつとして、家にいられなくなつて、こう叫ぶと、外の方へ飛び出しました。しかし、自由を欲する彼に対して、だれもとがめるものはありませんでした。

原っぱへいけば、そこには、かならず、二、三人の彼の仲間がいました。大空は、まんまんとして、原の上に青い天蓋のように、無限にひろがっているし、やわらかな草は、美しい敷物のごとく、地上を目のとどくかぎりしげっていました。

「世界じゆうを、どこまでも飛んでいける、渡り鳥はしあわせだね。」と、Nくんがいいました。

「そうするように、神さまが、羽をくだされたんだもの。」と、Kくんが答えました。

「なぜ、人間にだけ、それができないのだろうね。」と、Sくんが、ただすと、

「人間にだって、汽船や、飛行機を発明する力を神さまがくださったのだ。自由にどこへでもいけるようにね。」と、Kくんが、いいました。

「しかし、ここから先、いつてはいけないとか、ここから内へ入ってならないとか、実際はきゆうくつなんでないか。」と、S少年は、ききかえました。

「神さまは、世界をみんなのため、お造りになったのだから、だれにもそんな縄張りをする権利なんかなかったのだ。それを人間どうしが、たがいに意地わるをして、強いものが、弱いものをいじめて、かってに楽をしようとしたのだよ。」と、Kくんは答えて、なお、考えていました。少年はKくんの考えが、まったく自分の考えと一致しているのを知って、うれしかったのです。

「Kくん、僕は、人間があまり強欲なものだから、戦争をしたり、けんかをしたり、罪もない動物まで殺したりするのだと思うよ。神さまの与えられた生命を奪ってしまおうという、残忍な行為は、ゆるされないのでないかね。」と、少年は、ききました。

「だから、そういう残酷なことをするものには、きつと罰があたるだろう。」

「君もそう思う。僕も、天罰があたると思っている。」

「どうして、ほかの動物より、人間のほうがえらいんだらうね。」と、いままで、だまつていた、Kくんが口を開きました。

「おたがいに、愛情があり、しんせつだったから、万物の長といわれたが、いまは、残忍なこと、ほかの動物の比でないから、かえって、悪魔に近いといえるだろう。」と、S少年がいました。

このとき、赤く日は、西の山へ沈みかけていました。三人の少年は、しばらくだまつて、地平線をながめながら、思い思いの空想にふけていました。

考えれば、まだ地球には、どれほど、人の住んでいない広い土地があるかしかない。人間の必要とする宝が埋まっまっている山や、谷があるかしかない。また茫漠として、耕されていない野原があるかもしれない。それなのに、衣食住に窮して、死ななければならぬ人間がたくさんいる。それはどうしたことだろうか。

飢餓、戦争、奴隷、差別、みんな人間の社会のことであつて、かつて鳥類や、動物の世界にこんなようなあさましい、みにくい事実があつたであらうか。こんなことをしなくても、彼らは自然をたのしみ、なやむことなく、安心して生活するではない

か。こんなような疑いが、期せずして三人の頭の中にあつたのでした。

「ああ、忘れていた。こんど学校へ国際親善の題で、作文を書いて出すのだったね。」と、S少年が思い出して、いいました。

「君は、なにを書くつもり。」と、Nくんが、二人の方を向いて聞きました。

「僕は、外国のお友だちに、人間はみんな平等なのだから、おたがいに力を合せて、みんなが幸福になるような、いい世界を造ろうじゃないかと訴えるつもりだ。」と、Kくんが、いいました。

「Kちゃん、僕も、おなじなんだよ。いままで、大人たちの強欲から、戦争が起つたんだ。自分にとつてだけでなく、相手にとつても尊い生命であると知つたら、殺し合うことはできないはずだ。どんな幸福も、これほどの罪悪には償わないと思うよ。だから、神さまの心にそむくような武器は、いつさいなくしてしまつて、どうしたら平和にみんなが生活することができると、相談するようになりたい。世界じゅうのお友だちが、その気になつてくれたら、僕たちの時代には、いままでとちがった、りっぱな世界になれるのでないか。」と、S少年がいうと、

「賛成、賛成！」と、Nくんが同感して、熱い拍手をおくりました。

日はまったく暮れて、いつしか、夕焼けの名残すらなく、青々として澄みわたった、空のたれかかるはてに、黒々として、山々の影が浮かび上がって、そのいただきのあたりには、きらきらと、一つ、真珠のような星が、かがやきました。こんな時分になっても、まだあちらでは、遊んでいて、元気のあふれる子供らの声が、きこえていました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 14」講談社

1977（昭和52）年12月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「太陽と星の下」あかね書房

1952（昭和27）年1月

初出：「新児童文化 第6冊」

1950（昭和25）年9月

※表題は底本では、「太陽《たいよう》と星《ほし》の下《した》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2019年4月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<https://www.aozora.gr.jp/>）で作ら

れました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

太陽と星の下

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>